様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３８１０５４

研究課題名（和文）〈音楽家の耳〉トレーニングと『聴覚』の敏感期の音楽基礎教育プログラム

研究課題名（英文）"The Musician's Ear Comprehensive Training in Musicianship" for the Fundamental Music Program in "the Sensitive Period for Hearing"

研究代表者
田中　晴子（Tanaka, Haruko）

エリザベト音楽大学・音楽学部・准教授

研究者番号：００５７３０８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：幼児教育現場で「聴くこと」を重視する音楽基礎教育の実践研究を行った。実践にあたっては、音楽基礎教育システム〈音楽家の耳〉トレーニングとモンテッソーリ教育の教える技法「提供」を応用し、聴取、模倣、表現などの活動を通して「教える」のではなく「導く」教授法を開発した。実践での使用曲リストを作成し、使用頻度、取組む回数等から、音楽の流れに“ノリ”易い曲が積極的に音楽に耳を傾けることに繋がり、使用曲として相応しいことがわかった。また、音楽の流れに“ノル”（拍子を感じる）と音楽の変化や違いを捉えることが可能となり、自然に旋律やリズムを覚え、音楽の流れを失わない模倣・表現に繋がることがわかった。

研究成果の概要（英文）：This study reveals the effectiveness of a fundamental music education in early childhood focusing on "listening" in preschool classrooms. For experimental practices, the researchers developed a new educational technique, applying two systems, their own "the Musician's Ear Comprehensive Training in Musicianship" and "Presentation," a method of Montessori Education. This new technique, in which children can learn through activites such as listening, imitating, and expressing, contributes to more guiding than teaching.
Analyzing the chart of frequency of use per piece in a class, they concluded that appropriate pieces for their educational purposes are "groov-able." When children are "grooving on" such music, they realize changes and differences (dynamics, tempo, instrumentations, rhythm, etc.) in it and naturally learn its melody and rhythm. And this music experience led children to imitate and express the music without any effort while not loosing the music's flow.

研究分野：音楽基礎教育

キーワード：音楽基礎教育　幼児音楽教育　〈音楽家の耳〉トレーニング　聴覚の敏感期

## １．研究開始当初の背景

⑴　従来の幼児期の音楽活動においては、音楽は感性と表現に関する領域にあるが、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする表現に比重が置かれていることが多く、「聴くこと」があまりなされていないことに注目した。

⑵　エリザベト音楽大学で開発した音楽基礎教育システム〈音楽家の耳〉トレーニングは、読譜力のみでなく、楽譜を用いずに耳のみで音楽の諸要素を音楽の流れの中で瞬時に捉え、即座に反応する能力をも育成することを目的として開発された教育法である。「聴くこと」を重視することから、幼児期からの導入が可能である。

⑶　〈音楽家の耳〉トレーニングシステムが平成 19 年度文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）」に採択されたことに伴って開催されたシンポジウムで、参加者の一人であったモンテッソーリ教育関係者（連携研究者）から、その教育理念に共通する部分が見受けられるとの指摘を受けたことから、『聴覚』の敏感期にこそ、「聴くこと」を重視した音楽基礎教育が重要であると考えた。

## ２．研究の目的

⑴　幼児期の音楽活動において「聴くこと」、感じることを通して感性を養うことを重視し、音楽的な表現、すなわち「音楽する」ことに繋げる基礎教育プログラムを開発する。

⑵　音楽を「聴く」際に音楽基礎教育システム〈音楽家の耳〉トレーニングを導入し、聴取、模倣、表現などの活動を通して、音楽の流れの中で自然に音楽の諸要素を捉える為に必要な拍子感、和声感、機能感を身につける教授法を体系化する。また、モンテッソーリ教育の教える技法、「提供」(presentation)を応用し、「聴く」ことを「教える」のではなく、音楽を捉えるための道筋を示す、手助けをする「導く」教授法を開発する。

⑶　『聴覚』の敏感期に聴く曲のリストを作成し、教授法とともに教材集を作成する。

⑷　モンテッソーリ教育の教える技法、「提供」(presentation)を応用し、幼児の身体の発達と理解にあった楽器の提供方法を検討する。

## ３．研究の方法

⑴　幼児教育現場での音楽活動の実態調査として、アンケート調査を実施した。調査内容は「音楽活動の割合と内容：5 項目」「音楽活動の環境：5 項目」「楽器の使用・指導状況：5 項目」。広島市私立幼稚園協会、尾道市立幼稚園教育研究会の協力を得て、幼稚園、保育所、認定こども園、全 107 園を対象に実施し、61％の回答を得た。

⑵　実践研究については、広島市内の私立幼稚園 3 園（内、モンテッソーリ園は 2 園）の協力を得て継続的に「聴く」活動を行い、記録した。尾道市内の市立幼稚園では、2 年間に 2 回実施した。概要については次の通り。

- 対象：3～5 歳児、同年齢のグループ
  1 グループ 15 名まで
- 時間：午前中　1 グループ／15～20 分
- 場所：各実施園の部屋
- 配置：園児らが実施者を半円で囲む
- 音楽の媒体：ＣＤ
- 記録方法：ビデオ撮影。その映像をもとに実践内容、園児らの反応をまとめ、実践園の教員の所見も加える。
- 選曲：まずは 2 拍子、曲の基本的なテンポが中庸、曲の長さは、1 分半～2 分程度、変化・違い・特徴がわかり易い曲を中心に園児の様子を見ながら、試行的に選曲。
- 内容：〈音楽家の耳〉トレーニングを活用
- できるだけ、実践園の教員立ち会いのもとで実施するが、教員は客観的に見るのみとし、実践後、実施者とのディスカッションに参加する。

⑶　教授法の開発については、「聴く」活動の実践研究の際に〈音楽家の耳〉トレーニングを応用した聴取、模倣、表現などの活動を行い、モンテッソーリ教育の教える技法「提供」(presentation)を応用し、「聴く」ことを「教える」のではなく、「してみせる」ようにした。実践後、園児らの様子について、実践園の教員らとディスカッションを行い参考にした。また、海外での事例研究を行い参考にした。

⑷　「聴く」活動で使用する曲のリスト作成については、実践研究を行う中で試行的に選曲した曲を整理し、音楽的な要素を分析した。

⑸　楽器の提供方法については、打楽器奏者と連携を持ち、現場で使用頻度の高い打楽器について検討し、選定、購入した。

## ４．研究成果

⑴　アンケート調査の結果から、幼児教育現場での音楽活動の実態として、音楽を「聴く」ことはほとんど意識されておらず、「聞く・聞こえる」ことと混同されていること、音楽活動としては「歌う」活動に重きがおかれ、次に楽器を演奏することが特別意識されていることが明らかになり、「聴く」活動の重要性が浮き彫りとなった。

⑵　実践研究の成果として、3 年間継続的に行った 3 園の実施回数（のべ）については、次の通り。

Y 園：66 回（116 回）F 園：102 回　M 園：64 回。
Y 園は、平成 20 年度から実施している為、平成 20～24 年度までの回数を（）内に示している。
実践研究の記録から「聴く」活動で使用した曲の使用頻度（いくつのグループで使用したか）と取り組んだ回数（1 つのグループがその曲を何回にわたって聴いたか）、園児らの様子などを分析した結果、「聴く」活動に相応しい選曲の鍵になるのは、自然に音楽の流れにノリ、音楽に耳を傾けることができるかであることがわかった。音楽の流れを捉えることで、音楽的な要素の変化や違いを捉えることができ、旋律やリズムを自然に覚えることが可能となり、それを模倣する際にも音楽の流れのある表現となることが明らかになった。一方で、実践園の教員とのディスカッションから、同じ曲を使用しても、園児のコンディション（休み明け、行事の前後、家庭環境の変化など）に左右される為、園児らの反応のみで選曲について考察するのは難しいことがわかった。

⑶　教授法の開発としては、〈音楽家の耳〉トレーニングを応用し、聴取、模倣、表現などの活動を通して、「教える」のではなく、「導く」教授法を開発した。
音楽基礎教育の手法として、〈音楽家の耳〉トレーニングの項目の内、「拍子をたたく」、「リズムをたたく」、「真似して歌う」、「覚えて演奏する」、「リズムパターンをたたきながら真似して歌う」、「音楽の表情を感じる」などを応用し、聴取、模倣、表現などの活動を行った。教授法として、モンテッソーリ教育の教える技法、「提供」(presentation)を応用し、「教える」のではなく、諸要素を分析し、「してみせる」ようにした。
具体的には、次の通り。
まず「聴く」ことを提供する。実施者が音楽に興味を持ち、耳を傾けている様子、聴くことを楽しむという態度を「してみせる」。園児が聴かない場合、聴こうしない場合も、「聴く」ことを強制せず、周りへの配慮を促し、自主性を重視する。
次に「拍子をたたく」の前段階として、音楽の流れにノル「聴き方」を提供する。一緒に音楽を聴きながら、自然に呼吸し、音楽に身を委ね、音楽に合わせて身体を揺らすなど音楽にノルことを示す。その延長線上の動作として、音楽の周期を捉えて「拍子をたたく」。最初に「たたく」動作を示さないのは、その動作自体に興味を持ち、音楽の流れと無関係な「手を打つ」運動になるのを避ける為である。あくまでも音楽の流れを捉えることを重視する点に特徴がある。
さらに「曲の表情を感じる」を活用し、テンポや強弱の変化、楽器の音色の違いなどを捉える。音楽を聴いた後、変化や特徴、旋律の再現などについても質問し、園児が答えた後、もう一度聴いて確かめる。この繰り返しにより、園児は、「次はどうなるのか」と興味を持って音楽を聴くようになり、自然に曲全体を把握できるようになる。
全体を捉えたら、一部分の旋律の模倣（「真似して歌う」）、リズムの模倣（「リズムをたたく」）を行い、伴奏のリズムをたたきながらの旋律の模倣（リズムパターンをたたきながら真似してうたう）、旋律を覚えて歌う（「覚えて演奏する」）などを行う。単に旋律やリズムを覚えるのではなく、音楽の流れを感じ、音楽全体を捉えた上で行う模倣は、音楽的な表現に繋がる。
このように、園児に音楽的な何か（リズム、音階、音程、読譜など）を教えようとするのではなく、「聴く」ことを重視し、園児らが積極的に音楽に耳を傾けるよう音楽の「聴き方」を提供し、自らが音楽を捉えるよう導く幼児期の音楽基礎教育は他にみられない。

海外での事例研究としては、音楽基礎教育（ソルフェージュ）の先駆的な国として知られるフランスへ赴き、「聴くこと」を重視する音楽基礎教育（フォルマシオン・ミュジカル）のあり方の調査・研究を行った。また、幼児教育施設、小学校における音楽の授業の見学及び教員らとの面談を行った。調査施設は次の通り。

- パリ 12 区立音楽院 Conservatoire Paul Dukas 12ème arrondissement
- パリ市立音楽院 Conservatoire à rayonnement régional de Paris
- バイエン幼稚園 Ecole maternelle Bayen
- バイエン保育園 Crèche Collective de la Mairie de Paris (Bayen)
- アンリ・ノゲール小学校 L'école primaire public Henri Noguères
- マチス小学校 L'école primaire public Mathis

⑷　「聴く」活動で使用する曲のリスト作成としては、拍子毎に分類し、作曲家名、曲名、時間を記し、その曲を使用した際に園児らが捉える音楽的な要素（テンポ、強弱、楽器の音色など）を整理し、一覧にした。

⑸　楽器の提供方法としては、幼児の発達と理解にあった方法を検討する予定であったが、楽器の選択、準備にとどまった。幼児教育現場での実態調査の結果により、「聴く」ことの重要性が浮き彫りになり、「聴く」活動を実践する中で、十分に「聴くこと」を行い、音楽の自然な流れを捉え、音楽への理解を深めた上で楽器演奏に繋げる必要があることがわかった為、現段階で楽器の演奏方法を提供するのは、時期尚早であると判断した。

⑹　最終年度のまとめとして、研究成果報告会開催し、研究活動報告書を作成した。
研究成果報告会としては、これまでの研究

活動の報告と合わせて、幼児教育の専門家、音楽基礎教育の専門家がそれぞれの立場から「幼児期の音楽のあり方」について講演を行い、3 園の研究協力園の教員から実践研究についての感想、意見の発表を行った後、「幼児期の音楽活動のあり方について」と題した意見交換会を行った。参加者は、幼児教育関係者を中心に 23 名。概要については次の通り。

・日時：平成 27 年 11 月 8 日（日）
　　13:30～16:00
・場所：エリザベト音楽大学 506 号室

音楽基礎教育勉強会も開催し、音楽基礎教育の専門家とともに、「聴くこと」を重視するフランスのフォルマシオン・ミュジカルと〈音楽家の耳〉トレーニングの体験授業を行い、両システムを比較した。参加者は、音楽基礎教育関係者、ピアノ講師を中心に 16 名。概要については次の通り。

・日時：平成 27 年 11 月 9 日（月）
　　10:00～12:00
・場所：エリザベト音楽大学 333 号室

研究活動報告書としては、3 年間の研究活動を研究成果報告会の内容を中心にまとめた。主な内容については次の通り。

・研究組織
・本研究について
・3 年間の活動
・幼児教育現場における「聴く活動」
・幼児教育現場における「聴く活動」使用曲一覧
・フランスにおける音楽基礎教育の実態調査
・研究成果報告会「〈音楽家の耳〉トレーニングと『聴覚』の敏感期の音楽基礎教育プログラム」

## ５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2 件）

①<u>田中　晴子</u>、<u>岡田　陽子</u>、音楽基礎教育システム〈音楽家の耳〉トレーニングの幼児教育現場への活用に関する研究⑵～幼児教育現場における「聴く活動」の実践と選曲について～、エリザベト音楽大学研究紀要、査読有、第 35 巻、2015、pp．37-50

②<u>田中　晴子</u>、<u>岡田　陽子</u>、音楽基礎教育システム〈音楽家の耳〉トレーニングの幼児教育現場への活用に関する研究⑴～幼児教育現場における音楽活動の実態調査～、エリザベト音楽大学研究紀要、査読有、第 34 巻、2014、pp．49-56

〔学会発表〕（計　1 件）

①<u>田中　晴子</u>、<u>岡田　陽子</u>、幼児教育現場における「聴く活動」の実践研究～音楽基礎教育システム〈音楽家の耳〉トレーニングの活用～、日本音楽教育学会第 45 回大会、2014.10.26、聖心女子大学（東京）

〔図書〕（計　1 件）

①<u>田中　晴子</u>、エリザベト音楽大学〈音楽家の耳〉トレーニング研究所田中晴子（編集・発行）、「〈音楽家の耳〉トレーニングと『聴覚』の敏感期の音楽基礎教育プログラム」平成 25～27 年度活動報告書、2016、58

## ６．研究組織

(1)研究代表者
田中　晴子（TANAKA, Haruko）
エリザベト音楽大学・音楽学部・准教授
研究者番号：００５７３０８１

(2)研究分担者
岡田　陽子（OKADA, Yoko）
エリザベト音楽大学・音楽学部・准教授
研究者番号：７０５７３１０３

(3)連携研究者
相良　敦子（SAGARA, Atsuko）
長崎純心大学・人文学部・教授
研究者番号：５００９１００４